
やる気の欠けた転生者

ASTRAY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

やる気の欠けた転生者

【Nコード】

N4834K

【作者名】

ASTRAY

【あらすじ】

主人公はリリカルなのはの世界に転生した。しかし、原作介入をしようとせず情眼を貪る毎日。だがその毎日もある一つの出会いから徐々に崩れていった……

第1話 転生者になった日(前書き)

ぼちぼちがんばっていいことかなって思っています。とりあえずまずは原作ちゃんと見ないとダメ(笑)

第1話 転生者になった日

俺は死んだ。まあ始まりがこんなのはどうかと思うけど、だってしょうがないもん。死んじやったんだし。え？死因？言わないよ、自分のグロテスクな姿とか見たくないし・・・これからどうしようかなって死んだんだから学校とか行かなくていいし、むしろこれってラッキーなんじゃね？

とか考えてたら、目の前に女性の天使が現れた。

主人公のほうに目を向け、

「えっと・・・さんで間違いありませんよね？」

「ん、そうだけど」

「あなたは今回こちらの不手際で間違って死んじやったんです・・・」

と、衝撃の事実には、

「へーそうなんだ、で？」

「で？って驚かないんですか？死ぬはずがないのに死んじやったんですよ！！」

「いや過ぎたこと言ってもしょうがないし、で、俺はこれからどうなるの？」

「はあ、まあいいです。あなたはこれから他の世界で第2の人生を送ってもらいます」

「は？いいよめんど」あなたに拒否権はありません「ちょー！！」

「これがこのルールなんです」

「いやいや天国とのんびり過ごさせてくれたほうが楽だから」

「まあそういう選択肢もありますが、必ずしも天国に行けるとは限りませんよ？」

は目を丸くして、

「へ？どういうこと？」

その問いに天使は、

「もしそうした場合こちらのルールに乗っ取って閻魔王の審判により天国行きか地獄行きか決められます。それでもいいのでしたらそうしますが」

は落胆した声で、

「じゃあいいよ、転生で・・・」
と言いつめた。

天使は一息おいて、

「転生するにつれてあなたに伝えておくことがあります」
「ん？」

はやる気なさそうに返事を返す。

「まず一つ目があなたはその世界で最高クラスの素質を持ちます。
二つ目にあなたはアニメや漫画そういった類の力を一つだけ持っていくことができます。とは言ってもものによってはその世界に合わせて能力が低下、もしくは変化してしまうので気をつけてください」

なんてご都合主義な・・・とは思った。

「三つ目にはあなたは今の名を捨て新しい名をもって転生してもらいます」

だから俺の名前がさつきから なんだ！

「あとあなた以外にも転生者がいます」

「へえ、つまり俺以外にも転生者がいるってことか」

まあ、そんな感じはなんとなくしたし。

「ところでこの世界に転生するの？それによってどんな力持つか決めたいしさ」

その問いに天使は、

「リリカルなのはの世界です」
と答えた。

魔王まわのの世界か・・・まあ翠屋のケーキ食べてみたかったしいいかな。

「これで説明は終わりです。質問は？」

第2話 昼寝する転生者

というわけで転生しました。・・・とりあえずもうとてあんなもとても長い落下は

したくありません・・・。(涙)

やっぱり転生先は鳴海市でした(笑)。

赤ちゃんから人生やり直すってというのは大分シユールだった。・・・うん、いろんな意味でつらいです。

転生してできた新しい両親は転生して6年目の頃に亡くなり、現在は一人暮らしです。その時親戚のおじさんに一緒に暮らそうと言われたがそれを断り一人で暮らすことにした。ものすんごく反対されたけど。

転生した当初はさ、はりきって第2の人生を楽しんじゃうぜって感じに得た能力を使って原作介入をしようと思ひ、思わずはりきっちゃってさ、自分の能力試したり、魔法の練習とか頑張っちゃったんだよ。

転生して8年目の頃には大方のことはできるようになったからしばらくはいいかなってことで魔法の練習をやめて時が来ることを待つことにしたんだ、原作介入のタイミングを。

けど、その時が来ることはなかった。

簡単に言うとタイミングをはずしちゃったって言えばいいのかな？

その時まで忘れてたんだ、一他にも転生者がいることを《・・・。。。。》。そういえばそんなこと天使が言ってたね。他にも転生者がいるって。

気づいた時にはそいつがなのは達の隣にいて、無理矢理にまでも介入しちやえば良かったのかも知れないけど、その時の俺の頭はもう真っ白で。

なんて言えればいいのかな？自分の中の何かが崩れたみたいな？あれ、俺必要ないじゃん？そんな感じが頭の中をぐるぐるとかけめぐ

って。

もう原作介入しようとは思わないね、なんかそついうのしようとは思わなくなつたし、めんどくさくなつたし。

だから普通に人生送ります。

あつ、ちなみに俺の名前は蒼井 颯馬そしま、現在私立聖祥大学付属中学校2年生です。

え？無印？A's？知らないよ。

1年の終わりの近いある日。

真面目ないたって普通の授業風景。

しかしそんな中一人寝息をたてている者がいた。

教師が注意しても寝続け、知り合いが呼んでも寝続け、何があるうともひたすら寝続けていた。

背はそれほど高くなく痩身で、整えられてない黒髪の少年、蒼井颯馬は寝ていた。

授業を真面目に受けることなく、なぜ学校に通ってるのか言わんばかりに寝ていた。

きくんくくんかんくくん。

授業終了のチャイムがなり昼休みに入った。

生徒達は各々に弁当や購買で昼飯を食べる。

そこで颯馬はその緩みきつたやる気を感じられない青い目を開き、席を立ち、教室をでた。

そして屋上へ行き、ごろんと横になり目を閉じ寝ようとする。

《マスター、いいかげんやる気だしましようよ》

と突然颯馬の制服のポケットから声がした。

正確にはその中にある星の形をした青い石から声がした。

彼、颯馬とそのまわりの原作なのはキャラと転生者によって。

そのことに気づかない颯馬は、

「んじゃ昼休み終わったら起こしてよ。んじゃおやすみ」ZZZZZ

ZZZZZZ……」

《マスターアアアアア！私は目覚まし時計じゃありませんよお

おおおおおおお……！》

第2話 昼寝する転生者（後書き）

とりあえず2話目を、どうしようっデバイスどんなのにしようか思いつかない（笑）

第3話 転生者と魔王へなのは（前書き）

ついに原作キャラが登場します（笑）

第3話 転生者と魔王へなのは

この世に変わらないものなんてない。変わることに意味がある。それは嬉しいこと、悲しいこと、なにかなんて誰にもわからない。けどそれはとても大切なこと。

きつとこれが始まりなんだ、昼寝ばかりしてる馬鹿な俺の日々にとつてとても特別ななにかの……

学年が変わり、気づいたら2年生になっていた。

時々思うんだ。このままでいいのかわかって。生き方を見直すべきじゃないかって。

けど、それを考えるのもめんどうだから変わらない。不変が一番だと思う。

だってさ、おれいやだよ、あんな砲撃や砲撃や砲撃が飛び交うよ。うなところに行くの。怖いじゃん、めんどいじゃん、だるいじゃん、だから俺は逃げ続けるんだ。そうずっと……

今日は私立聖祥大学付属中学校の始業式。

新しい教室、新しいクラスメイト、新しい担任、そういう新しいことづくしの中一人だけそんなのとは無縁のように蒼井颯馬は新しい自分の席で寝息を立てていた。

《マスター、マスター!》

(ん、なに?俺は寝ることで忙しいんだけど)

《いや、そんなことに忙しいもなしでしょう。いいかげん学年も変

わったことですし、友達の人や二人つくったらどうですか？
とフェルナは言った。

そう、颯馬には友達はいない。つくるのがめんどくさかったから
という理由で作らなかつた。

転生してからのというものとても普通とは言い難い存在に颯馬はな
つていた。

その問いに颯馬は、

(いやいいよ、どうせ俺寝てるだけだし)

《しかし、いつまでもそういうわけには……》

と言うフェルナの言葉を無視して再び寝ようとするがあることに
気づいた。

教室は颯馬一人だけになっていた。

颯馬はやる気のない目を開き顔を上げ、

「あれ？なんでおれだけ？」

その問いにフェルナは少し落胆して、

《他の方々は全員体育館に行きましたよ。そのくらい気づいてくだ
さいよ、マスター》

と答えた。

「なんかちよつとイラつときたけどまあいいや、あんなのであるのだ
るいつて前々から思ってたんだよね」

《もともとでてませんでしたけどね》

「なんか今日は厳しくないフェルナ？」

《私はいつもこんな調子ですよ、マスター。ところでマスター気づ
いてますよね？このクラスに魔力保持者がいたのを》

その問いに対して颯馬は少し真面目になり、

「ああ、4人いたな。なのは達3人と後もう一人は誰かは知らんが
結構な実力者だろう」

《そうですね、全員魔力量AAA以上でしたし》

「まあ、俺が魔導士だって気づくことはないでしょ多分」

《ずっとリミッターかけてますしね》

颯馬にはリミッターが掛けられてる。とはいっても自分で掛けたものなのでとくに問題はない。魔法の練習をやめた際に「こんぐらい掛けたときや問題ないだろ」と言って一気に掛けたら、魔力を放出できなくなるほど魔力量が下がってしまった。

だから、多分気づかれないと思う。

そして颯馬は呟く。

「しっかしなんでよりによって同じクラスなのかなあ〜?」

《いいかげんなんかしろってことじゃないですか?》

とのフェルナの答えに颯馬は肩をすくめ、

「え〜、めんどさいから嫌なんですけど・・・というかずつと昼寝して過ごせればいいよ」

《それでは将来どうするのですか?このままだったらと過ごすわけにもいかないでしょう》

「・・・えつとだめかな?」

《駄目に決まってるでしょう!何かやりたいことはないんですか!》

との言葉に颯馬は少し考え、

「と、言われてもな〜・・・とくにやりたいこともないし・・・」

原作介入をする気がなくなってからとくに何かしたいと思うことはなくなってしまう、ただ普通に過ごしていられればいいかなって思うようになってしまった。

まあ普通とは言えないけどね、寝てばっかだし。

変わらなくちゃいけないのかもしれない、だからといって今の生き方を変えるつもりはない。今の生き方は気にいってるし、そのうちなんとかなるだろう。だって自分から戦いの場に行きたくはないし、管理局なんてめんどくさい組織になんて入りたくないし。

・・・まあ、大丈夫だろう、なのは達に関わらないようにすれば問題ないだろうし、あの転生者もきつとこっちに対して興味なんかないだろうし。

とか考えていると、足音が聞こえてきた。
どうやら始業式が終わったようだ。

(フェルナ)

と颯馬は呼びかける。

《なんですかマスター？》

「んじゃ、俺寝るわ」

《って、マスター！？まだ話は終わって……》

颯馬は目を閉じ机に突っ伏し寝始めた。

《……はあ》

とフェルナはため息をついた。

自己紹介も終わり(颯馬はずっと寝てた)、役員決めも終わり(颯馬はずっと寝てた)、席替えが行われていた。

と言っても颯馬の席は先生も諦めたのかずっと窓側の一番後ろだった。気づいた頃にはずつとこの席になってたので颯馬はとくに気にすることなく、寝ていた。

席替えも終わり、隣の席の人ぐらい確認しとこうかなと颯馬は隣をちらっと見た。

今思うとそれが間違いだった。

なんでそのときの俺はそんなことしようと思ってしまったのだろう。

もしかしたらこれが全ての始まりへの扉だったのかもしれない。

決して行くことのないだろうと思っていた道への扉。

もはや行くことを拒んでしまっていた道への扉。

その扉を、俺は気づいたときには開いてしまってたのかもしれない。

ちらっと見たとき、颯馬の思考は停止した。

なぜならそこには……魔王まおうがいた。

え、嘘、なんで、なんで隣なのよ。夢だよ、夢、そつだ夢だ。

とパニック状態になっている颯馬にフェルナは、
《マスター、これは夢じゃありません。現実です》

と一気に颯馬を現実に戻した。

その視線にたまたま気づいたのか、魔王なのはは笑顔をこちらに向け、
「あ、起きてたんだ。自己紹介でも言ったけど、私は高町なのは、
よろしくね蒼井颯馬君、だっけ？」

始まりはとても特別なこと。

その始めの一步はとても重要だけど、それはとてもわかりやすい
もの場合や、とてもわかりにくい場合もある。

それは自分の中の何かが変わる瞬間。

俺はその一步を踏み出してしまったのかもしれない……

第3話 転生者と魔王へなのは《後書き》

原作キャラだすって書いたのにちょっとしかでてないorz

第4話 転生者は絶望した！

ほんのちよつとした偶然で俺の日常は変わってしまった。

だってこのことから魔法の世界にどつぷりと漬かってしまうとは思わなかったんだ。

だからさ、だからさ、俺は後悔するんだ。

けど人生なんてそんなもん、後になってあれは今となっては良い思い出。

俺はそう思いたくないけど。

真面目な授業風景、まあそれが普通なことだと思う。

けど今日はちよつといつもと違っていた。

いつも寝ているだけのあの蒼井颯馬が起きていた。

そのやる気のない緩んだ目をかろつじて開き、顔をほんの少しだけ上げて黒板に目を向けていた。

こんなの受ける意味ないよな、うん、ないな、よし寝よう。

と目を閉じようとする、隣から殺気がする。

魔王だ。

その魔王は颯馬に向かって「なに寝ようとしてるのかな？」という感じの目をこちらに向けている。

「い、いやちよつとあの問題が難しいなって思ったから、目を瞑って考えようとしていただけですよ、はい、け、けっして寝ようとしてたわけじゃありませんよ」

と、その視線に耐え切れず思わず小声で喋ってしまった。

それに魔王は、

「いやいや、ちゃんと授業受けようよ」

颯馬の肩を揺らす。

返事がない、ただの昼寝野郎のようだ。

「ちゃんと授業受けようよ」

颯馬の肩を激しく揺らす。

返事がない、ただの昼寝野郎のようだ。

「ちゃんと授業受けようよ」

渡された教科書でペチペチと颯馬を叩く。

返事がない、ただの昼寝野郎のようだ。

「ん〜、えいつ!」

「むぎゃつ!」

ゴスつと辞書の角で叩かれた。

「いやいやいやいや、おかしいでしょ!なんでもいきなり教科書から辞書!?!もうちよつと手順踏もうよ!?!?!」

そのやる気のない目を開きなのはに言う。

「だって起きない颯馬君がいけないんだと思うよ。ここは学校、授業を受けるための場所だよ」

と言い、それに颯馬は

「いやあ〜、俺にとっては寝るためにあるんだ、うんそうだ、だから俺は寝……」

気づくとなのはの手にはさつ辞書きよりも危険なものが握られていた。

「うん、そうだね、学校は授業を受けるための場所だよね、うん、授業受けよつか、だからとりあえずそれをしまってください」

「わかればよろしい」

颯馬は諦め授業を受けることにした。

そのやりとりを見て、何人かの男子生徒のペンが折れたりしたんだが、颯馬には関係なかった。

そんなこんなで最近颯馬は魔王なのはがいるときは基本真面目に?授業を受けている。

それを見ていた颯馬のデバイス、フェルナは、

《マスターが授業の時間起きてるなんて……やっとマスターに
依然みたいなやる気が……》

(いや戻ってないから)

《ちよつとずつ変わっていくことが大切なんです……!!!!》
とか言ってくる。

確かに、ちよつとは颯馬は変わったかもしれない。

少なくともなのはのいる前では授業を受けている。

辞書で何回殴られたかはわからないが、それでもちゃんと受けて
いたと思う。

なのはとのやりとりもはや彼の日常の一つだった。

しかし、そのとき颯馬は気づいてなかった。

一人、颯馬に対して別種の疑念をもって見ている人物がいたのを。

世界は都合良くまわっていることはない。

誰かにとって都合の良い世界はあるはずがない。

そんなものただの幻想でしかない。

理不尽に死ぬこともあれば、偶然助かることもある。

それが生きていくってことだ思うんだ。

第4話 転生者は絶望した！（後書き）

そろそろ戦いを入れていきたいと思います。

第5話 避けられない転生者（前書き）

サブタイトルの書き方統一しようかな・・・・・・・・

第5話 避けられない転生者

似たような境遇のはずなのにすれ違う心。
わかりあえるはずなのにそうしない。
ほんの少しのすれ違いが誤解を生み物語をかたどっていく。
それが俺の戦いへの宴だった……

魔王まのまが隣になって数日がたった。

魔王まのまは慣れなれしく「颯馬君」と呼び、それを見て他の男子生徒は殺気のコもった視線をこちらへ向ける。時々金髪の女子生徒からも向けられているような気もするがそれは気にしないことにする。

しかし今日は少し違った。

魔王まのまとその他2名フエイト、はやての姿はなかった。

颯馬はそんなことも気にせず、むしろ魔王まのまがいないことを喜び昼寝にいそしんでいた。

最近は起きていた（かろうじて）こともあったせいか、数学の授業中に、

「颯馬、この問題を解いてみる」と先生に指された。

颯馬はそんなことなど気にせず寝続けていると、

「おまえは高町がいないと真面目に授業を受けることもできんのか」と、からかってくる。
まわりの生徒は笑ったり、殺気のコもった視線をこちらに向けたりしてくる。

颯馬はそのことを耳には入れてはいるものの、

(だるいなあ)

と緩みきっていた。

ある視線に気づくことなく。

放課後、生徒達も下校し一人寝続けている颯馬を、

《マスター起きてください、もう放課後ですよ》

と、彼の目覚ま・・・デバイス、フェルナが声をかける。

《なんかいまいやな言葉が聞こえた気がしたんですけど》

「気のせいだろ、目覚まし時計」

《いや、いまあきらかにおかしかったでしょう、マスター》

とかいうやりとりをし、颯馬は緩みきった目を開き、だらけきった体を起こす。

そして帰ろうと下駄箱に行き、下駄箱の扉を開けると。

「・・・・・・・・」

《・・・・・・・・》

手紙と思われるものが入っていた。

思わず颯馬は下駄箱の扉を閉める。

「いやいや」

再び下駄箱の扉を開けてみる。

そこにはやはり手紙が入っていた。

そしてまた下駄箱の扉を閉める。

再び下駄箱の扉を開ける。

閉める。

開ける。

閉める。

開ける。

閉め・・・・・・・・

《いいかげん現実を見ましようよ・・・・・・・・》

とフェルナが颯馬を現実に引き戻す。

颯馬は諦め手紙を開いた。

【前々からあなたのことをずっと見ていました。あなたに伝えたいことがあります。放課後、学校の屋上に来てください】
と書いてあった、差出人の名前はわからない。

それを見て颯馬は、

「ストーリーカー？」

《いやいや、どう見てもラブレターでしょう》

とボケ、フェルナがつっこんだ。

「いやもう時間的に大分アウトだろ、よし、帰ろう」と帰ろうとし、それにフェルナが

逃げよう

《行くだけ行きましようよ、まだいるかもしれませんし》

と言い、

「いやめんどいし帰ろう」

《それは相手に失礼でしょう》

「帰る」

《行きましよう》

「帰る」

《行きましよう》

「帰る」

《行きましよう》

「帰る」

《行きましよう》

というやりとりを10分ぐらい繰り返し、颯馬は
「わかった、行くだけ行ってみるよ」

と諦めて屋上に向かうことにした……………

屋上に着いてみると、颯馬以外の人影はなかった。

《いませんね、やはりマスターの言ったとおり帰ってしまったので
しょうか》

とフェルナが言い、颯馬は周囲を見渡しながら、

「ほらやっぱいいなかったじゃ……………」

そこで颯馬はある異変に気がついた。

確かに周囲に人影はない、それどころか校庭にも生徒の姿がなかった。まだ5時を過ぎた頃、部活で残っている生徒がいるはずである。

不気味な静けさが漂う中、突然後ろから声がした。

「まさか、結界の中にいたってことに気づいてなかったの？」

その声に颯馬は後ろを振り向いた。

そこには赤みがかかった茶髪でセミロング、やる気に満ち溢れた目、颯馬より若干背が低目の魔法使いのローブのようなものを見に纏った女性がいた。

颯馬は緩みきった目を向け、

「えっとあなたは確か同じクラスの・・・」

「エレナ・エンカウンターよ、転生者同士仲良くしましょうか」

と言うが、彼女の纏っている雰囲気からは殺気しか感じられない。その殺気を颯馬は軽く受け流し、

「転生者、え？なんのこと？俺はただ手紙に従って屋上来ただけなんですけど」

と軽く切り返す。

それに対しエレナは

「ええ、その手紙は私が書きました。言っときますがとぼけても無駄ですよ」

「え？何を？そもそも俺みたいな普通の人間にわけのわからないこと言われてもね・・・伝えたいことってそれだけ？なら俺は帰りま・・・」

最後まで言い切ることはできなかった。

なぜなら、突然現れたエレナの杖を喉元に突きつけられたからだ。杖を構えたまま、エレナは言う。

「少なくともあなたみたいな人物に普通という言葉は当てはまりません。それに帰れませんよ？私が結界を張っているかぎり脱出は不可能です」

それに颯馬は気の抜けた声で、

「はあく、だつたらその結界とやらを解いてよ。眠いし、だるいし・
・・さつさと家に帰りたいたいんだけど。それに俺は転生者とかいう
やつじゃないし」

颯馬の言葉を無視しエレナは言う。

「転生者とはいわばこの世界のもともとの流れから外れた者。原作
と違う展開、なのはさんがあなたに接触した、それだけで理由は充
分です。それに私の隙を突いて逃げようとしてるあたりからして普
通の人間ではないことがわかります」

「くっ、ばれてたか・・・」

颯馬は逃げ出す機会をうかがっていたが、すでに気づかれていた
ようだ

そこでフェルナが、

《どうしますマスター、リミッターを解除しますか？このままでは
まずいですよ》

(いや、それこそ彼女の思いつぼだ。ここははったりを通す)

「別にあつちから勝手に接触してきたただし理由にはならないと
思っただよね。それにさ普通、こういう状況誰だって逃げたいと思
っよ」

と颯馬は言った。

その答えにエレナは少し考え、

「ではこうしましょう」

と言いつつ杖を颯馬に向けなおして、

「魔法の射手！^{サキタ・マギカ} 光の^{ウチ・ルークス}一矢！！」

光の矢が放たれ、颯馬はそれをもろに喰らい、

「がっ！！」

屋上からその身を宙に飛ばされた。

第5話 避けられない転生者（後書き）

記念すべき最初の呪文がネギま！という……
がんばってバトルシーンを書いていきたいです。
ラブレターなんてまともなの書けません（笑）

第6話 転生者と転生者（前書き）

タイトルを変えようかなと真面目に考えてます（笑）

とフェルナが言う。

《たとえリミッターを解除しても到底破壊できそうにありませんし、やはりここはあの魔導師を倒すしかないでしょう》

「はあ、俺戦うのとか嫌いだしめんどくさいし、だるいし、怖いし、痛いのがだし……」

とぼやき、

《ならそれをあの魔導師に伝えればいいんじゃないですか、といつても伝えた途端に撃たれるのは目に見えてますけどね》

とフェルナが言い、エレナを見ると杖をこちらに向け、こちらがどうでるか様子をうかがっていた。

その構えに隙はありそうもない。

颯馬はため息をつき、

「いや無理でしょ、勝てない勝てない、だって相手は現役だよ、それに対してこっちは魔法最後使ったの6年前だよ、勝てるはずがないじゃん」

《だからといって黙って撃たれるわけにはいかないでしょう!!》

「……わかったよ、やればいいんだろやれば、たくっ、こっちはただ昼寝ばかりの毎日を過ごしてただけなのに《私は嫌ですけどね》……フェルナ、リミッター解除」

《了承しました、マスター。リミッター解除》

その途端颯馬の魔力が一気に吹き上がった。おそらくAランクはあるだろう。

そして颯馬はその目をエレナの方へ向け、

「おまえが悪いんだ、覚悟決めろよ」

と言った。

「覚悟を決める……？それはこちらのセリフです」

というエレナの言葉を無視し、颯馬の魔力が白く輝き、手を宙に掲げ空間に光の文字を描き込み始めた。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

と呪文を唱えた。途端に颯馬の動きが加速し始めた。

エレナは颯馬に向かって、

「ウンデトリリーギン多ーリトウス・ルーキス 魔法の射手 サギタ・マキカ 連弾・光の29矢!!!」

と銀色の光の矢を放つ。

しかしそれを颯馬は、

「遅いよ」

と言い、あっさりと全ての矢を避け、

《Flier Fin》

と靴に光の羽根を伸ばして飛び距離をつめ、エレナに向かって蹴りを放つ。

その攻撃をエレナは杖で止め、

「やっと戦う気になってくれたようね、けどそれじゃ私は倒せないわ！」

ウーヌス・フルゴル 闇夜切り裂く コンキデンス・ノクテナン・メア・マヌー・エンス 一条の光 我が手に宿りて イニミクム・エダット 敵を喰らえ フルグロティオー・アルピカンス 白き雷

「!!!」

と杖を持ってないほうの手で稲妻を放射して颯馬を攻撃する。

「うおっ! やばっ!」

《Protection》

と咄嗟にミッドチルダ式の防御バリアを発生させ、攻撃を防御し

エレナから距離を取る。

「セラテントリーギンタ 光の精霊37柱!!! 集い来たりて サギテント・イニミクム 敵を射て」

と続けて攻撃を放とうとする。しかし颯馬はそれに合わせるよう

に右手を掲げ、詠唱を始める。

「セラテントリーギンタ 光の精霊37柱 集い来たりて サギテント・イニミクム 敵を射て・・・」

「サギタ・マキカ 魔法の射手 連弾・光の37矢」

全く同じ魔法が放たれ衝突しあった。

「同じ魔法を!!!」

エレナは驚愕した。気づけば颯馬の魔力光の色が白からエレナと同じ銀色に変わっている。

その隙を逃さないかのように颯馬は宙に手を躍らせ魔方陣を完成

させる。

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

今度は魔力光の色が黄色になり雷光がエレナに向かって放たれる。

それを、

デフレクシオ

「風楯」

と魔法の盾を作りエレナは防御した。

ありえない、魔法をコピーしただけでなく魔力光の色まで変わった!?

しかも既に私のとは別に3種類の術式の魔法を使ってきている。

そんなことをあっさりやってのけた颯馬を見るとある異変に気づいた。

颯馬の目に朱の五方星が浮かび上がっているのを。

「その目何?」

と思わずエレナは呟く。

「この目を知らないってことはこの作品については知らないんだね。結界解いてくれて教えてあげるよ」

と言い、その言葉に対しエレナは若干苛立ちを覚え、

「調子に乗らないで!そっちが手数で攻めるといふのならこっちは数で攻めるまでよ!!光の精霊97柱!!!」
セラテントリーギス・リットゥス・ルーキス

「うおっ!やばっ!!!」

「集い来たりて 敵を射て魔法の射手 連弾・光の97矢!!!」
コエウンテース サギテント・イニミクサ・マギカ セリエス ルーキス

さきほどよりも数が増した光の矢が颯馬を襲う。

いくら遅いといっても数が多ければどうしようもなかった。

颯馬は回避行動を取り、回避に努めるが、何発かは回避しきれず、プロテクションでかろうじて防いでいた。

颯馬は反撃を取ろうとするが、その機会を潰すように、

「光の精霊199柱!!! 集い来たりて 敵を射て!!!」
ウンデトウオゲンテール・ネグリトゥス コエウンテース イニミクス・サギテント

エレナは光の矢を撃ち続ける。

颯馬は思わず4階の窓から学校の中に逃げ込んだ。

「そんなので私の攻撃から逃げられるとも思ってるの!」
光の矢は縦横無尽に学校を破壊していく。

「うおおおおおおおおおおおお」

その中を必死で逃げ続ける颯馬に、

《マスター、このまま逃げていても勝てませんよ》

とフェルナが言ってくるのに対し、

「いや、無理だから! 魔力量的に無理だから、ってぎゃあああああ
あ」

目の前の教室が消し飛び瓦礫が颯馬を襲う。

かろうじて回避するも颯馬はもうへとへとだった。

《さすがに、ひさしぶりの身体強化魔法は身体に応えますね》

「まあそれもあるけど、長い間魔法を使ってなかったってこともあるし……って攻撃が止んだ?」

さきほどまでの攻撃が突然止み不気味な静けさが漂う。

「なんで攻撃が止んだ? まだ魔力に余裕はあるはず……ってまさか!」

悪寒がし、颯馬は急いで学校からでようとする。

しかし、すでに手遅れだった。

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンス
「雷の暴風!」

強力な銀色の旋風と稲妻が学校を呑み込んだ。

第6話 転生者と転生者（後書き）

文が単調で同じパターンの気がするし・・・あと作者は基本オ
リジナルとか考えることができません（笑）

第7話 転生者は語ったかもしれない(前書き)

だめだ、俺にはまともな戦闘シーンが書けないorz

第7話 転生者は語ったかもしれない

「雷の暴風」の旋風と稲妻より学校はただの瓦礫と化していた。その原因であるエレナは学校だったところに降り立ち、颯馬の生死を確かめようとしていた。

本人はダメージを与えるつもりはあったものの殺すつもりはなかった。こちらに対する抵抗の意思をなくせばいいと思っていた。しかし、魔法は非殺傷設定とはいえ、瓦礫は別、潰れて死んでいてもおかしくなかった。

うわ、もしかして本当に死んじゃった？屋上するときもはあいつが転生者だって確信してたから撃ったわけだし、でもでも今回はさすがにまずかったな・・・生きてさえいれば治癒魔法で治せるんだけど・・・死んでない、死んでないよね？ね？

エレナは焦っていた。

他の転生者を倒すことはあっても殺したことは一度もない。殺しはよくないと思ってるし、もし殺してしまったら、なのは達に向けるなんてできないと思っている。

そう考えつつ周囲を見渡すが、颯馬らしき姿は見当たらなかった。本当に殺したかもしれない、その可能性を頭の中で必死に否定しつつ、颯馬を探し続けていると、突如前方の瓦礫から、

「稲光^{いなひかり}」

と声がし、空に向かって雷光が放たれる。

そしてその雷光が放たれた位置から颯馬が姿を現した。

颯馬はかろうじて死の危機を回避していた。

「雷の暴風」が放たれ、学校が破壊され崩れた瞬間広域防御魔法で身を守るも重さに耐え切れず、瓦礫に呑み込まれかけたが、瓦礫と瓦礫の間に身を滑らせてなんとか凌ぎきった。

とはいえ、BJはぼろぼろ、左手は変な方向に曲がり頭から血を

流している。

立っているのがやつとのように見える。

しかし、いつもと変わらないやる気のない声で、

「やっぱ、左手折れてるよ・・・口の中から血の味もするし・・・」
とか呟き、その緩みきつた目をエレナに向け、

「なあ、なんで俺に対してそんなに敵意むき出しなわけ？理由になるようなことした覚えないし、なによりめんどくさいんだけど・・・」

と聞いた。

これだけやってくるんだそれなりな理由がないとおかしい、颯馬はそう考えていた。

エレナは颯馬が生きていたことを安堵しつつ、その問いに答えた。

「私だけがリリカルなのはの物語に介入するためよ」

「は？」

わけがわからんというような表情颯馬はし、エレナは続ける。

「この世界は私やあなたのような転生者がたいした数ではないけど存在するわ。一人一人思想や理念は違えど、だれもが原作に介入しようとする。だからそうさせないために私は他の転生者を潰す、そういう考えをなくさせるためにね」

「・・・・・・・・」

つまり、

颯馬がなのはと接触した だから潰す

颯馬はただ彼女のエゴに巻き込まれただけ。

ただそれだけ、それだけのことで颯馬はこうして命の危機に瀕していることになる。

それだけのことで颯馬の昼寝（おろい）ばかりの日常をぶち壊された。

「たったそれだけの理由でおまえは俺を潰（転生者）そうとするのかよ、なんでおまえみたいなのがなのは達と一緒にいれるのかもわからねえ」

颯馬はなにかを吹っ切ったように坦々と言う。

「それだけの理由？そうね、でも転生者ってそういうものじゃないの？誰だって自分の好きな作品の世界に行けたら、そのキャラ達と仲良くなりたい、最悪の展開を変えたいって思うのは。でもそうするのには他の転生者^{役者}はいらえない、自分一人で十分なのよ！」

そのあまりに自分勝手な言葉に、

「馬鹿馬鹿しい」

「なっ」

颯馬は続ける。

「つまり自分の理想論を他人に押し付けてるだけだろ。そんなやつに原作の介入なんてする資格なんてねえよ。別にいいじゃねえか、何人介入しようが。だいいち、俺にはおまえがなのは達を馬鹿にしてるようにしか聞こえないね、なにが原作の介入だ、ここはアニメの世界であり、アニメの世界じゃねえ、ただおおまかな流れが同じだけだろ！一人一人アニメとは違う、ちゃんとした意思を持っているんだよ！そんなこともわからねえやつが自分の理想論を他人に押し付けるんじゃない！」

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさああああああい！！！！」

もういい殺してやる、あんたなんか死んじゃえばいいんだっ！！

！！！！

エレナは空中に舞い上がり詠唱を唱え始める、

ウエニアント・スヒーリトウスアエリアーレス・フルグリエンテース

「来れ雷精 風の精！！！！」

それに合わせ颯馬も詠唱を唱え始める、

ウエニアント・スヒーリトウスアエリアーレス・フルグリエンテース

「来れ雷精 風の精！！！！」

「雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐

ヨウノイス・テンベスターズ・フルグリエンテース

雷の暴風！！！！」

強力な旋風と稲妻が炸裂した。

詠唱はこちらのほうが速かったし、あの身体である魔力量で撃つて勝てるわけがない。

エレナはそう考えていた、たとえ真似されようが勝てるぞ。
しかし、ありえないことが起こった。

どういうわけか、どういうわけか、颯馬のほうが威力が完全に上
回っていた。

なぜ、そう考える間もなく颯馬の「雷の暴風」を喰らい、意識は
途絶えた。

エレナは気がつく和学校の屋上にいた。

さきほどまでのできごととはあくまで結界内で起こったことであり、
現実では何の影響もない。

身を起こし周囲を見渡すが颯馬の姿はなかった。

颯馬はエレナにとどめはささなかった。

まあもともとあの性格でそんなことはするとは思えないが。
敗北した、その事実だけがエレナに残っていた。

たいした理由もなく人はぶつかり合う。

それは誰かと誰かが理解し合うためにあるため。

できれば戦わず話し合っ解決できたほうがずっと良い。

そう考えながら人と関わりあうのを俺はいやだと思ってた。

第7話 転生者は語ったかもしれない(後書き)

さっさと終わらせたかったので無理矢理終わらせちゃいました。

やっぱり原作キャラとか入れたほうがいいと思うし、もっと主人公のやる気のなさをだせたほうが良いと思う(笑)

そしてエレナを当初考えていたときよりも大分かけ離れてしまったような気がする……理由とか無理矢理過ぎると思うんだ……こんなことなら普段から真面目に作文とかに取り組んどけば良かった(涙)

とりあえず戦闘シーンをがんばってもっと良いものにしていきます。

第8話 拒む転生者（前書き）

書き方がなんか毎回ちよつとずつ違うような気がするし、後先を考
えてないし・・・そうだ俺は屑だ！どうしようもない屑だ！飛
翔せよ！スターダストドラゴン！シューティングソニック！

第8話 拒む転生者

崩壊してしまつた安息の日々。

もう引き返すことはできないあの夢の日々。

一つの戦いは俺を新たなる戦いへと導いていく……

覚悟をきめなくてはならない、しかし俺はそれを拒み続ける……

・

エレナとの戦いから数日が過ぎた。

あの戦いの後、俺はエレナを屋上に運び逃げるように帰つた。その後が大変だつた……

身体強化魔法を解いた後、全身が筋肉痛になるわ、骨折した左腕を治すために元の方向に戻そうと無理矢理力技で……うん、ものすんごく痛かつた、あんなのを平然とやつてのける人達の気持ちなんてわかりたくないね。

とりあえず、残りの傷は治癒魔法で治しました。

ぼかぼかとした日差しが教室の中に差し込み、颯馬は例によって夢の世界にダイブインっ！！しているのだが、

ゴスっ！！

魔王まのほの広辞苑攻撃により、一気に夢の世界から現実に戻される。

いたいいたいいたい、治癒魔法で治したとはいえ俺怪我人ですよ

！だいいちなんでそんなに都合よく広辞苑それがあるんだよ！

しかし颯馬の事情など知るはずもない魔王なのはは、

「ちゃんと授業受けよっか」

と微笑みながら言ってくる。

その笑顔はだれもがドキッとしてもいいと思うほどかわいいのだが、今の颯馬にとってそれは悪魔の微笑にしか見えない。

颯馬は机に突っ伏しつつ、その緩んだ目を魔王なのはへと向け、

「俺はここのところ忙しいんです。だから寝ます」

と言い目を閉じようとする。それに魔王なのはは、

「忙しいって例えば？」

と言い返してきて、

「いろいろ忙しいんです」

と颯馬は言い返し、

「いろいろって例えばどんなことなの？」

とさらに魔王なのはが言い返し、

「いろいろはいろいろで……って実力行使は止めてください。受けるこちらの身にもなってください、高町さん」

魔王なのはは広辞苑片手に、

「だってこうでもしないと颯馬君起きてくれないし、なにより楽しいし」

とかさりげなくひどいことを言い、

「……いや、いまの最後の一言あきらかにおかしいですよ」

と颯馬は突っ込む。

そんな中、二人のやりとりを無視するかのように授業は進んでいた。

先生が注意することもはじめのほうはあったのだが、

颯馬が寝る 魔王なのはが起こす 寝る 起こす 見かねた先生が注意する その間に颯馬が寝る その颯馬を魔王なのはが起こす その繰り返し

というわけで放置することにしていた。

男子生徒もはじめは殺気こもった視線で見えていたが、最近では隣れみの目で颯馬を見ている。

とは言っても、金髪は相変わらず殺気こもった視線で見えてくるし、狸は面白がって見ている。しかし悪魔は最早こつちを見ようともしてこなかった。

その後エレナから接触してくることはなかった。

颯馬自身もそれにこしたことはないと思ってたし、なのは達はその戦いがあつたことすら知らないようだった。

どうやって隠蔽したかは知らないが颯馬にとってこれ以上関わらなくて済むのならそれでいいと考えていたし、なによりめんどいと思っていたからだ。

だから俺は寝ようとし続ける。

原作介入なんかしたくない、めんどくさいし、痛い思いももう嫌だ！！

なんで魔王が隣になってしまったのか、その原因となった席替えを恨みつつ、目を閉じ夢の世界へダイブー……

ゴスっ！！」「んぎゃっ！！」

と颯馬の悪夢は続く。

昼休み、それが颯馬にとって数少ない学校で誰にも邪魔されず昼寝できる時間だった。

魔王が早退するときはいいのだが、そうじゃない場合、この時間はなによりもかけがえのない時間だった。

颯馬はそのことにちょっと、ほんのちょっとだけ悲しいなあ〜と

第8話 拒む転生者（後書き）

んゝいろいろやらかしちゃった気がします。第6話の書き直し、第7話で取り返しのかないことをして、だけどこれが自分のスタイルだと思つてがんばっていきたいと思います。正直日常パートのネタがもうなきに等しいです（笑）

第9話 転生者と現実逃避（前書き）

そろそろ次の戦闘に入るかな。そして原作キャラをもっと登場させないと（笑）

第9話 転生者と現実逃避

覚悟を決める、それはきつと避けられないこと。

これから先の未来へ向けて決めなくてはいけないこと。

これがそう原作はしまり介入への道へと向けて。

そのとき、俺は覚悟を決める必要があった……

5月も終わりに近づきそろそろ梅雨の時期に近づきつつあるこの頃。

とはいっても颯馬の生活にとくに変わりはない、いつもどおり昼寝にいそしんでいる。

変わったことといえば……なのはの広辞苑せいごが百科事典にランクアップしました（キラッ）

ガスッ！と前より威力上がったよといわんばかりに颯馬の頭部を百科事典が襲う！

「がはっ！え？何？なんで百科事典になってんの！？ものすごく痛いんですけど！」

と颯馬は涙目になりつつ魔王まのに向かって言い、

「ある人が言ったんだよ、広辞苑よりも百科事典のほうがいいって」

「いやいやいや、起こすのにそこまで威力いらないよ！？という方がいいかげん諦めてよ！俺は授業中は寝てたいの！」

「諦めるのは颯馬君のほうだよ、授業中はちゃんと起きてなくちゃ、ね？」

なにが「ね？」だよこの魔王が……

そんなことを考える颯馬に魔王まのは、

「えいつ！」

ガスッ！

と容赦のない2撃目が颯馬を襲い、

「んぎゃああああああ」

颯馬の悲鳴が教室に響く。

そんなやりとりが続く中、教師や生徒達は気にせず黙々と授業は続いていた。

「ねえなのは？」

「なあに、フェイトちゃん？」

昼休み、仲良く弁当を食べる中フェイトがなのはに質問する。

「2年になってから隣の蒼井颯馬だっけ？とよく話しかけてるけどなんで？というか大分授業の妨害となっているんだけど、なのは気づいてる？」

とフェイトが言い、それに続けて、

「そうそう他のクラスでも噂になってるわよ。なのはが隣の席の男子生徒を本で殴ってるって」

「なのはちゃん・・さすがに暴力はいけなと思うよ」

アリサとすずかが言う。それになのはが、

「にははははは、でもそうしないと颯馬君起きないんだもん」

「でも、なのはがそこまでする必要はないと思うよ」

「それは私も思うな。なのはがあんなやつのためにそこまでする必要はないと思うわ」

とフェイトに続きエレナまで言う。

というかエレナちゃん、颯馬君に対する扱いひどいと思うの、それに颯馬君の名前がでるたびに嫌そうな顔するし、2人の間でなに

かあったのかな？よし、あとで颯馬君に聞いてみようと思うの。

とか考えているとはやてが、

「ちゅちゅち、皆わかっくらんなく、これはつまりなのはちゃんずばりあれやる！」

「あれ？」

となのはは首をかしげ、

「つまり蒼井颯馬のことが好きゅちゅことやるー！」

とのはやての発言に、

「「ぶっ！」「」

アリサとすずかは飲み物を吹き出しそうになり、

「な、ななな、なのは！？そなの！？そついうことなの！？」

「ちよちよ！お、落ち着いてフェイトちゃん！？」

フェイトは慌ててなのはの肩を揺さぶり、

バキッ！

エレナにいたっては箸を折るしまつ。

なのははフェイトを落ち着かせてから、

「な、何言ってるの、はやてちゃん！」

と言つて、

「なあに、なのはちゃん、恥ずかしがることはないやる。席替えが運命の出会いだった・・・そう言つとなんかしまらんなく、せやけどわたしも驚きやわく、なのはちゃんの好みがああいうのやったなんて」

「だから違つてば！」

となのはが言つので、それにはやては、

「だったらなんでや？なんで蒼井颯馬にあないに話しかけたりするん？」

との質問に、なのはは、

「なんかね、颯馬君がなんとなくだけど寂しそうに見えたからなの」
となのははちゅつと真面目に答えるのだが、はやてはからかうよ
うに、

「そうかあゝ、そういうところに惹かれたんかあゝ」

「だから、はやてちゃんなんでそういう方向に話をもっていこうとするのをおおおおおおお」

空になのはの叫び声が空しく響く。

昼休みが終わり、午後の授業が始まる。

フェイトとはやてとエレナはいない。午後から管理局の仕事があるそうだ。

去り際にはやてちゃんが、

「んじゃ、がんばってな」

とか言うからフェイトちゃんは慌てだすし、エレナちゃんからは黒いオーラがでてるし、というか本当にエレナちゃんと颯馬君の間で何かあったの!?

その原因の張本人である颯馬君は性懲りもなく気持ちよさそうに寝ています。

だから私は片手に百科事典を持って、
ガスッ!

と角で颯馬君を叩く。

けっして八つ当たりというわけじゃないよ。

「んぎゃっ!痛い、痛いんですけど高町さん!いいかげん寝かせてくださいよ!?!」

「颯馬君が寝てるのがいけないのっ!」

あれえゝ、魔王^{なのは}さん?俺何かしました?なんかものすんごく怒ってませんか?

とか考えてると突然、

《マスター、マスター!》

とフェルナが話しかけてくるので、

(なに、こっちはそれどころじゃないんですけど)

《海鳴臨海公園付近で魔力反応が発生しました》

と言っているのでよく意識すると確かに魔力反応がある。

なのはもそれに気がついたのだらう、勢いよく席を立ち、

「どうした、高町?」

「すみません先生、突然用事ができたので早退します!」

「待て高町!? いったいどういう理由で・・・」

と先生の言葉を無視して教室を飛び出して行った。

《さあマスター! 私達も行きましょう!》

とフェルナが言うも、

(行くわけないだろ、んなめんどいところに)》

《そんなっ、マスター、女の子1人行かせて心配じゃないんですかっ!?》

との言葉に、

(心配も何もあいつは管理局のEースだよ? 負けるわけないじゃん。それに今までだってほら、関わらないでいたんだから何の問題もないだろ)

《ですが・・・》

(ですがも何もないの、めんどくさいし、だるいし、だから俺は寝るっ! おやすみっ!)

《ちょ! マスタアアアアアアアアアアア!?》

第10話 転生者は目を向けた

なのははBJを纏い、さきほど魔力反応があった海鳴臨海公園に
向かっていた。バリアジャケット

(けっこう大きい反応だけど私1人でも大丈夫だよね？レイジング
ハート)

《大丈夫ですマスター、私達ならできます》

となのはの質問にレイジングハートが答える。

そして向かった先にはなにかがいた。

それは何と言っているのだろうか、2mを越す巨体、全身は装甲
で覆われ、その顔は悪魔にも神のようにも見える。おそらく騎士甲
冑なのだろうが、とてもそのようには見えなかった。

その見た目になのはは驚きつつもその正体不明の相手に向かって
レイジングハートを向け、

「こちらは時空管理局魔導師です、どういつ目的で現れたかは知ら
ないけど、とりあえずお話を。」

「そうか貴様が管理局の・・・だったら俺は貴様を倒すだけだ！！
喰らえ！ロケットオ！パアアアンチッ！」

鉄の拳がなのはに向かって放たれた。

その頃、颯馬はとくに動こうともせずに寝ようとしていた。

しかし、寝ることができない。断じて、断じてなのはのことが心
配なわけではない。なぜなら、さっきから颯馬のデバイス兼目覚ま
し時計であるフェルナが、

《マスター！マスター！行きましようよ！それに私は目覚まし時計

じやありませんよおおおおおー!》

とさつきからしつこく言ってくるからだ。まあ、最後の一言は置いていて。

何度も何度も何度も言ってくるので颯馬は思わずやる気のぬけた声で、

(なんで今回はこんなにもしつこいのかなあ? PT事件や闇の書事プレシア・テストロッサのときだって動かなかったじゃん? なんで俺がわざわざ動かなくちゃいけないわけよ?)

《だって今回のことは原作にもなかったですし・・・それにもしあの子になにかあつたらどうするんですか!? もしかしたら相手は転生者かもしれませんよ!?!》

とフェルナが言うも、

(いや、それはないだろ。転生者だったらあのエレナあくまがすでに動いてるだろうし・・・それに原作になかったつつつても、この期間の間の話がなかったただけだろ。俺はわざわざめんどくさいところに行くのが嫌なの! たくつ、俺は寝てただけだったのに・・・)

と颯馬が言い、フェルナは、

《そう言っつていつまで逃げ続けるつもりですか、マスター》

(逃げる? 俺が? 何から?)

《全てです。寝ることで現実から目を背け何かをしようとしないうつたいマスターはそれをいつまで続けるつもりなんですか》

(・・・)

その言葉に颯馬は何も言えなくなる。確かにめんどくさい、だるい、寝てたいと言つのも颯馬の本心だろう、しかしフェルナには納得がいかなかった。

(・・・って、いきなり何言い出すんだよ、フェルナ? ほらっ、俺は昔からめんどくさがりだしさ、な? それにあいつなのはだよ? 管理局の白い魔王だよ? 心配することなんて何にもないじゃん?)

《そうやってはぐらかそうとして・・・それにあなただって本当は心のどこかで心配してるんじゃないですか、彼女のことを》

その言葉に颯馬はまた何も言えなくなる。

確かにほんの、ほんのちよつとは心配してるかもしれないよ？ けどさ、だからって俺が動く必要はないじゃん？

だいいちもし本当に転生者だったとしたら、あのエレナがあくまなんとかするだろうし、もしかしたら他の転生者が現れてなのはを助けるかもしれないじゃん？

ああもう、この目覚まし時計がごちゃごちゃ言うから何がなんだかわかんなくてきた。

《ほら、行きましようよ、マスター？ 原作介入しちゃいましょうよ》
(だあああああああ、くっそ！ わかったよ！ 行けばいいんだろ、この目覚まし時計が！！ 言っとくけど、原作介入するつもりはないぞ！ ちよつと、ほんのちよつと心配だから様子を見に行くだけだからな！)

《それでいいんですよ、マスター。というより、私のこと今あきらかに目覚まし時計って言いましたよねっ！？ そのところの訂正を・》

(うっさい！)

《そんなっ！？》

そして颯馬はだるそうに席を立ち上がり鞆も持たず教室を出ようとし、それが先生の目に止まり、

「どうした颯馬？ おまえも用事か？」

と聞くのに、だるそうに、

「いえ、携帯の充電が切れたんで帰ります」

「いやちよつと待て！ それはあきらかにおかしいだろ！」

と言う先生の言葉を無視し颯馬は教室を去って行った。

行かないと決めていた場所へと向かって。

《Acceler Shooter》

「シュートッ！」

と掛け声とともに多量のスフィアが発生し、あらゆる方向から敵を襲つ。

全弾命中し、それによつて起こつた煙で敵が見えなくなり、

「やった？」

と言うも、煙の中から、

「ロケットオ！パアアアンチッ！」

と鉄の拳が飛んできたのははかるうじて回避する。

しかも敵の方を見てみるとかすり傷1つついてない。

「そんな攻撃がマシンガーに効くとおもうなああ！」

「うそっ！無傷なの！？だったらこれで・・・！」

《Shooting Mode》

「ダイバイン！」

《Buster!》

と桜色の砲撃魔法が敵に向かって放たれる。それに敵は、

「っ！だつたらこっちは、ブウレストオ！ファイヤアッ！」

と胸の板から赤褐色の熱線が放たれお互いの攻撃を打ち消しあつた。

「ロケットオ！パアアアンチッ！」 「ブウレストオ！ファイヤアッ！」

と敵は次々と攻撃を放ってくる。

なのははそれを空中でなんとか回避している。

（ええっと、どうすればいいかな、レイジングハート？並みの攻撃は通用しそうにないし、やっぱりここはスターライトブレイカーかエクセリオンバスターで・・・）

《それがいいでしょう、マスター。相手は飛行能力は持ってないでしょうから距離を取って仕掛けましょう》

となのはがさらに距離を取ろうとすると、

「俺から逃げられると思うなあああ！来おい！ジエェットオ！スクランダーッ！」

と掛け声と共にどこからともなくジェットスクランダーが飛んできて、

「スクランダー・クロスッ！」

と敵に翼が装着された。

えっ！何！？どっから飛んできたの！？

というなのはの疑問など敵は知るはずもなく、なのはとの距離を一気に詰めて、

「これならどうだっ！ルウストオ！ハリケエエエント！」

と口のスリットから強風が炸裂する。なのはは反応が間に合わず、

《Protection》

とレイジングハートが防御バリアを発生させ、かるうじて直撃はまぬがれた。

相手も空が飛べる。だったらエクセリオンバスターA・C・Sで・

と考える、

「レイジングハート！エクセリオンモードっ！」

と言つても、

《すいません、マスター。今の敵の攻撃によりカートリッジの使用ができなくなりました》

レイジングハートを見てみると所々錆び付いていた、よく見るとBJも所々風化している。

攻撃手段が封じられたなのはは困惑し、その隙を敵が逃すはずがなく、

「もらった！ロケットオ！パアアアンチッ！」

鉄の拳がなのはに向かつて飛んだ。

《Protection》

とレイジングハートが防御バリアを発生させるも、容易く突き破られ直撃し、

「きゃあああああああああああ」

なのはは勢いよく地面に叩きつけられた。

なのはは今の衝撃で動くことができず、そこに向かって敵が、

「これで終わりだ！光子カビ・」

とその目を輝かせとどめにの一撃を放とうとするが、

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

突如雷光が放たれ、その攻撃が直撃し、とどめを指すことはできなかつた。

その攻撃が放たれた方向に目を向け、

「だれだ！」

と聞き、その攻撃を放った張本人は、

「はあ、お前みたいなのに名乗る名はねえよ」

とその緩みきった目をそちらに向け、颯馬は答えた。

第10話 転生者は目を向けた（後書き）

相変わらず作者は未熟ですががんばって書いていきます。

気づいたらユニークの総合が1万を超えた！？と作者は喜びの限りなのでついでにオリキャラの募集をしたいと思います。

名前・性別・見た目・使って欲しい作品を書いてメッセージボックスに送ってください！性格とかその他もろもろ書きちゃってくださってもかまいません！

ここで主人公颯馬から一言！！

颯馬「読者の皆さんこの作品を読んでくださってありがとうございますござい
ます、よし一言言っただから俺は寝まーす」

うおおい！はえーよっ！もうちょっとか何か言ってよ！？これから
も応援よろしくお願いしますとかさ！

颯馬「はあ、なんで俺がそんなこと言わなくちゃいけないの？だ
いいち今回のオリキャラ募集だつてあれだろ？書き始めたは良いが
既にネタが切れかかっているってやつだろ？誰も送ってくれないって
それよりもうちよつとあの悪魔の出番を増やそうとか考えろよ」

すみません、けどネタが思いつかないんだもん……

颯馬「それにオリキャラ募集だつて作者が知らない作品書かれたら
どうするんだよ。あ、後もしこんな作者の募集に申し込んでくれる
素晴らしい人がいるなら言っとくけど、作者オリキャラの扱いヘタ
だから1話で出番終了だつてこともありえるかもしれないよ？」

そんなことするわけないでしょ。

颯馬「ったく、なんでこんなに俺がしゃべらせられてんだよ……
ああ作者がいけないんだ、ろくにまともな物語書けないから……
・っつて言うかももう1部の読者はもう今後の展開の1部は予想ついて
るよ？こんなパクることしかできない作者の物語なんて、きつと俺
がぼ……」

やめてっ！そっから先は言わないでええええええええええええええええ
！！

第11話 後悔する転生者（前書き）

あれ？この勢いだったら今日中にもう1話いけるんじゃない？

第11話 後悔する転生者

敵の攻撃をまともに受けた私は身動きが取れませんでした。

とどめの1撃が放たれようとして、私死んじやうのかな、ごめん
ヴィータちゃん、と考えたとき突然その敵に向かって雷光が放たれ
ました。

フェイトちゃん？と思いその方向に目を向けると、そこにいたの
はフェイトちゃんじゃありませんでした。

そこにいたのは、隣の席の颯馬君でした………

「はあ、お前みたいなのに名乗る名はねえよ」

颯馬はその緩みきつた目で敵へと目を向ける。

あれえ、あれつてもしかしなくてもマジンガーZだよね？と考
え
る。

やばくね？稲光直撃したはずなのに全然効いてないよ。

「もう1度言う、貴様は誰だ！」

とマジンガーZ（仮名）は颯馬に聞く。

《こういうときはセオリー通りに言うのがヒーローってやつですよ、
マスター》

（いやいや、ああいう脳味噌が筋肉でできてそうなのに教えるのい
やだよ、俺ヒーローでも何でもないし、つかあの姿から見てマジで
転生者っぽいな、あのエレナはいったい何をやってんだよ）

《私の言ったとおりだったでしょう、マスター。さあ、あの脳筋野

郎をやつつけてなのはさんを助けましょう!」

(つつたく、だるいな・・・とりあえず高町から助けよう、あの落ち方はちよつとやばい)

そして颯馬は魔力を白く輝かせ、手を宙に掲げ空間に光の文字を描き込み始め呪文を唱える。

「我・契約文を捧げ・大地に眠る悪意の精獣を宿す」

脳内のリミッターが外され、颯馬の身体が加速し始める。

なのはの方に向かい駆け出そうとするが、

「俺を無視するなああああああつ!口オケットオ!パアアアア
ンチツ!」

とマジンガーZ(仮名)の肘から先が分離し、鉄の拳が颯馬に向かつて飛ぶ。

いや、絶対に人間的にそれアウトだよな?と颯馬は考え、

《つてマスター、ぼうつとしないでください、当たりますよ!?!》

「うおつ!やべつ!つてぎゃあああああああ!」

咄嗟に回避するも、その鉄の拳は地面に直撃し衝撃波に呑み込まれ颯馬は吹っ飛ばされた。

《F l i e r F i n》

空中で体制を立て直し、颯馬は自分のいた場所に目を向ける。

あれ喰らったら絶対やばいだろ・・・つて、やべえつ!戻ってきた。

鉄の拳が地面から再び飛んできて、颯馬に向かって飛んで来た。

「まあ、ちゃんと意識してれば普通に避けれるんだけどね」

と言い、ヒョイツとあっさり避け、マジンガーZ(仮名)の方へと目を向けた。

「なあ、なんでここに来た?おまえももしかして原作介入しに来ましたよとかつてやつ?」

と問い、マジンガーZ(仮名)は、

「人の質問を無視したくせに・・・原作介入そんなもの知らんつ!
俺はここに管理局の強いやつがいると聞き、そいつを倒しに来ただけだつ!」

「はあ！？あのエレナあくまよりも質が悪いじゃねえかよ！？」

「とにかく貴様も敵なら倒すだけだっ！」

と言い、マジンガーZ（仮名）の目が輝き始める。

颯馬は回避行動を取ろうとするが、

《マスター駄目ですっ！避けたらなのはさんに当たりますっ！》

（つて嘘だろ！）

見てみると射線上にはぶちりなのはが入ってしまったている。

かんがえたな！！ちくしょう！！！！とかふざけてる場合じゃ

ねえ！

颯馬は目に朱の五方星を浮かび上がり輝き始める。

その瞳でマジンガーZ（仮名）が放とうとする魔法の威力、構造、発動方式を全て読み取る。

（さつきより威力がやばいな、とても止められるような気がしねえ、下手すりゃスターライトブレイカー並だぞ！？けどチャージにちよつと時間がかかりそうだな、だったら！）

突如颯馬の魔力光が白から銀色に輝き、詠唱を始める。

セラテントリーギンタ スピリットヨネウツキキス
「光の精霊37柱 集い来たりて 敵を射て魔法の射手 連弾・光ルキスの37矢」

37の光の矢が放たれ、あらゆる方向からマジンガーZ（仮名）に向かつて飛んで行く。

マジンガーZ（仮名）は防御しようともせず、

「そんなもの聞かっ！喰らえっ！光子カビ・！」

と放とうとするが、突如37の矢は1本に収束されマジンガーZ

（仮名）の額を正確に撃ち抜いた。

頭の角度が変えられ、光子カビームはあらぬ方向へ飛び、

「ぐあああああああああ」

マジンガーZ（仮名）はその反動に耐え切れず、体制を崩し、海に落下した。

それを見た颯馬はなのはが落下した場所へ向かう。

《いいんですか、マスター？あの脳筋を放つといて？》

「それより今は高町を救う方が先だ。あれはとて俺1人じゃ倒せそうじゃない。……はあ、都合良くあの3人が戻って来てくれたりしないかなあ、そうすりゃ俺、戦う必要なさそうなのに」

《そういう可能性を考えるのは止めましようよ。いざとなったら前回みたいに切り札を使って……》

「ストップ、前回は仕方ないの、あのときは頭に血が昇ってたから思わず使っちゃったの、ったく、なんで俺が戦わなくちゃいけないんだよ、めんどくせえ……」

と言いながら、なのはの所へ降り立つ。

颯馬はなのはの姿を見て驚く。

バリアジャケット

BJは血で赤く染まり、額から血を流し、呼吸もやっとなのように見えるところから内臓器官もダメージを受けてしまってるのだろう。その姿を見て颯馬は後悔する。

なんで来てしまったのだろう、なんでもつとはやく行かなかったんだろう、と。

そして思い出す、自分が死んだ日あの日のことを。自分が死んだ姿を見て、後悔した、吐き気がした、こんなもの見たくない、と思ったときのことを。

なのはは颯馬の方へと目を向け、

「……そ……颯馬、くん？……な……なんで？」

「……黙ってる高町、今すぐその傷を治す」

と言い、魔力光を今度は黄緑色に変えて宙に手を躍らせ魔方陣を作り始める、

《マスターに何をしますか！？》

レイジングハートが何かを言うてくるが気にしない。俺は魔方陣を完成させる。

「求めるは癒し手>>>・疲射ひこる」

と呪文を唱え、なのはの傷を治す。

なのははちよつとよろけながら立ち上がり、

「颯馬君って魔導師だったの!？」

と聞いてくる。颯馬はその質問にああ、ついにやってしまったという顔をして、

「・・・んまあ、そうなるな。たくつ、高町が弱いからいけないんだ、俺はただ寝てたかっただけなのに・・・ブツブツ」
と言う、それになのはは、

「あ、あれは仕方なかったんだもん！まさか突然あんな攻撃されると思ってなかったし・・・痛っ」

「騒ぐな、騒ぐな、治したとはいえ完全ではないんだから・・・俺ほんと何してるんだろ・・・」

それに、

《マスターはなんだかんだでやらないって言ってもやっちゃいますからね。さあマスター！なのはさんは助けたことですし、そんなポン骨デバイスは放つといてあの敵をやっつけましょう！！》

《誰がポン骨デバイスですか・・・》

《え？あなたのことですが、わかりませんか？》

《目覚まし時計としてしか使われてなさそうあなたに言われたくはありません！》

《ってあなたまでそう言うのですか！？》

とのやりとりに、

「・・・うっさい」

「レ、レイジングハート落ち着いて？」

と颯馬となのはが言う。

「だいいち、俺達だけじゃ倒せそうにないから、こうして力を借りようとしてるんだろ？つっても予想外だったな、レイジングハートがダメージ受けてるなんて・・・スターライトブレイカー撃てるか？」

《・・・撃てますよ！撃つてみせます！デイベインバスターだつて撃つても大丈夫です！》

《よくそんな状態でそんな減らず口を叩けますね、錆付いて今にも壊れそうじゃないですか》

「2、2人？とも落ち着いて、ね？というより颯馬君なんでスターライトブレイカー知ってるの！？」

「・・・企業秘密ということ、というより来るぞ！たくっ、めんどくせえ！」

空にはさきほど海に落ちたマジンガーZ（仮名）がいた。

怒りで声を震わせ、

「お前ら2人消し炭にしてくれる！」

と言ってくる。

「やっべえ、すげ、怒ってるよ」

とやる気のない声で言い、

「って何落ち着いて言ってるの！？」

とかなのはが言い、

《さあ、やってやりましょう、マスター！》

《行きましょう、マスター。こんなやつらに格の違いを見せつけてやりましょう》

とフェルナとレイジングハートが言う。

「・・・んじゃやりますか、だるいけど」

と言い颯馬はそのやる気のない目でマジンガーZ（仮名）を見上げた。

第11話 後悔する転生者（後書き）

オリキャラ募集してまさか1時間もしないうちにはやくも来るとは、秋代様本当にありがとございます。どんどん募集してますので他の方々も思いついたら送ってください。

現在GIN様とのコラボを考えてますので、どうぞご期待ください。

第12話 転生者と予感（前書き）

すみません。31日中に書くとか言ったくせに気づいたら4月1日でした。

本当に申し訳ありません。――*――<

とは思えない。

《普段から鍛えとかないからこういうことになるんですよ、マスタ
ー》

(うつさい！俺はもともと関わるつもりがなかった！ああめんど
くさい、眠くなってきた)

せめてレイジングハートが万全の状態だったらな〜と思うが過ぎ
たことを考えても仕方がない。

あの敵を倒すためには、どうにかしてスターライトブレイカーを
撃ち込める状況に持ち込むしかない。

だったら俺のやることはただ1つつ！って、俺ってそういうキャ
ラじゃないと思うんだよね。

なんで熱くなってるんだらう、俺ってもしかしてそういう展開望
んでた・・・？

いやいやいやいや、それはない、それはない。とか考えていると、
颯馬は自分がいつもと全く違う調子でいたことに気がついた。

そうだ、俺はめんどくさい、だるいがモットーじゃん。何真面目
になってんだろ？あくでも、ちょっとは真面目になったほうが良い
のかな？まあいつか、何か良い案浮かんできたし。

そして颯馬はなのはに声をかけ、
(なあ高町、真面目な話、本当にスターライトブレイカー撃てるか
？)

(えっと、多分1発ぐらいならもつとは思っただけど・・・けど
そうするとしたらもう他の攻撃はできないかな？私の魔力もレイジ
ングハートも結構きついし)

《本当に役に立ちませんね、このポン骨デバイス》

《あなたは黙ってなさい、起こすことしか能がないくせに》

《なんですって！？》

(いや、そこうるさいから。んじゃ、俺らがなんとかして敵動けな
くするからそこになんとか1発撃ちこんでよ、俺疲れるのとか嫌い
だからそういう必殺技持ってないし)

(疲れるからって・・・うん、わかった！)

《格の違いを見せてあげますよ》

《勝手に言っただけさ》

なのは敵との距離を取り、マジンガーZ(仮名)はそれを追おうとするも、その間に颯馬が立ちふさがった。

「どっとうつもりだ！」

とマジンガーZ(仮名)は颯馬に問う。

「いやさあ、もしかするとさ俺1人でもいけるんじゃないかな？って思ったからさ、彼女には下がってもらおうかなって」

「俺を馬鹿にしてるのか!？」

マジンガーZ(仮名)は憤慨する。そりゃ見るからにやる気のない人間にそう言われたら怒りたくもなるさ。

「つまあ、お前と戦うのは疲れるし、だるいし、めんどくさい。けど別にやれないわけじゃないよ？俺がその気になればお前なんか倒せちゃうよ？」

「貴様ああ！言わせてみれば好き放題言いやがってっ！喰らええ！ブウレストオ！」

よし挑発は成功した、ってこの射線上にはまたなのはがいるしいいいいいいい！

現在なのははスターライトブレイカーを撃つために魔力を集中させているので動くことができない。

「ああもう、なんでこうも都合良くいかないかなあ？」

「ファイヤアアッ！」

「ちっ！」

その瞬間、颯馬は魔力色を桜色に変え右手を掲げ、

「デイベイン」

《Buster!》

砲撃を放って攻撃を打ち消しあった。

その光景を少し離れたところから見ていたなのは、

(え？レイジングハートあれって・・・)

《はい、マスター。彼は今マスターと全く同じ魔力反応で全く同じ威力の砲撃魔法を撃ちました》

(もしかしてあの目が魔法をコピーしてるのかな？)

《おそらくそうでしょう。あのデバイスは周囲の魔力を吸収及び蓄積することにしか使われてないようですし》

(周囲の魔力を？なんで？)

《おそらく彼の魔力補助のためでしょうが・・・気にくわないですな、それだけのことしかできそうにないのに、私をポン骨呼ばわりするとは》

レイジングハートの声は怒りで震えていた。

(にやははは、とりあえずレイジングハート、私達はやるべきことをやろう！)

《わかりました、マスター》

空がわれる！炎が舞う！ってふざけてる場合じゃなかった。

今ので魔力無駄に消費しちゃったしなあ、それにロケットパンチ避けるのは楽だけど疲れるんだよな。ルストハリケーンと光子カビーム、あの2つは絶対に撃たせるわけにはいかない。

「光子カビイイム！」

って考えてるそばから撃ってきたよ！チャージしてないから威力はそこまでないと思うけど。

颯馬はそう考え避け、光子カビームは地上に放たれ、半径100mほどが消滅した。

(・・・)

やばい、思っていた以上にやばい。

思わずめんどくさい、逃げ出したいなって思ってしまう。

普段だったらそうやって逃げればいい。介入なんてこと考えずいつも通り寝るなりしてればいい。

けど今回はそういうわけにはいかない。

行ってしまったから。

言ってしまったから。

こうやって関わってなのはに「なんとかして敵動けなくするから」とか言っちゃったから。

ちょっと後悔してしまう、でもこれでいいんじゃないかとも思ってしまう。

めんどくさいけどやってやるぜっ！って考えてしまう。

だから、その目で敵を見据える。わずかな勝利の可能性に賭けて、そこでなのはが、

(颯馬君！準備できたよ、いつでもいけるよ！)

と都合の良いことを言ってくる。

それに颯馬はちょっと、ほんのちょっとだけど少しいつもよりやる気のある声で、

「ならやるか、めんどいけど。行くぞフェルナ！」

《了解です、マスター！》

そして颯馬はマジンガーZ(仮名)に向かって突っ込む。まっすぐ勢いよく突っ込む。

「馬鹿正面に突撃だっ！そんなもの通ると思うなああ！口オケツトオ！パアアアンチツ！」

2つの鉄の拳が颯馬に向かって飛んでくる。颯馬はそれを勢いを殺さないようにしてギリギリの距離で避ける。かすった衝撃で吹っ飛びそうになるがそれを必死にこらえる。

そして颯馬の魔力色が銀色に変わる、それと同時にフェルナの中に蓄積された魔力を炸裂させる。

(実際に見たわけじゃないけど、多分・・・できる！)

とか思わずやる気をだす。わずかだけど、それでも今の颯馬には十分な。

そして颯馬は詠唱を始める。

「光の精霊199柱！！ 集い来たりて・・・」
コエウンテース

それを見たマジンガーZ（仮名）も若干やばいと思ったのか、
「っ！溶けて消えろっ！ルウストオ！」

と颯馬に向かつて放とうとし、颯馬はそれを避けようとせず、
右手に魔力を収束させ、敵の顔面に向けて拳を放つ、

イニミクス・サキテント
「敵を射て！桜華崩拳っ！！」

「ハリケエエエエッ！」

それと同時に敵の技も炸裂する。

颯馬の拳は敵の顔面に直撃し、マジンガーZ（仮名）の攻撃は颯馬を溶かそうとする。

拳の骨が技の威力とあまりの硬さに砕ける音がするが気にしない。
強酸で拳に焼けつくような痛みが襲ってくるが気にしない。

あまりの痛みを意識が飛びそうになるけど、それも気にしない。

この拳で敵を吹っ飛ばす、ただそれだけだ。

「エ、エレナちゃんの魔法！？」

あの銀色の魔力光見間違えるはずがない。

やっぱり2人はどこかで知り合って、と考える間もなく颯馬が敵を吹っ飛ばし、なのはに向かつて、

「今だ！撃てっ！なのはあっ！！」

と叫ぶ。その声に、

「うん、わかった！いくよ、レイジングハート」

となのはの魔力がより一層輝きを増し始め、膨大な魔力が収束される。

《Starlight Breaker》

「全力全開！スターライトブレイカー！！！！！！」

それに敵は反応することができず、

「な！ぐああああああああ！！」

桜色の巨大な砲撃が敵を呑み込んだ。

「レイジングハート大丈夫？」

《すいません、マスター。正直な所大分きついです》

錆付いて、さらにその状態であれだけの魔法を撃ち、レイジングハートはもうボロボロだった。

火花を散らして、今にも壊れそうである。

「ごめんね、レイジングハート。後で修理してもらおう」

すると、上空から魔力反応がしてフェイト、エレナ、はやてがやっつて来た。

「ごめんね、なのは。もつとはやく間に合えば・・・ってなのは！
？その血大丈夫！？」

その言葉にそういえば、自分もボロボロだということをなのはは思い出す。

「にはははは、うん、一応大丈夫だよ」

「いやなのはちゃん？大丈夫ってすごい真っ赤なんよ、ほんまに大丈夫なんか！？」

とフェイトとはやては慌て、エレナはやれやれという顔で、

「なのはさんが大丈夫ってことは大丈夫なんでしょう。本人より慌ててどうするのよ全く。ところでなのはさん、あなた確か治癒魔法使えなかったわよね？一体どうやってその怪我治したの？」

その質問になのはは元気よく、

「颯馬君が治してくれたんだよっ！」

と答えた。

一瞬世界が止まったような気がした。

「えと、なのは？颯馬君ってあの颯馬？」

「うん、そうだよフェイトちゃん」

と信じられないという顔でフェイトは聞き、

「なあ、なのはちゃん？ほんまに？ほんまに蒼井颯馬なんか？冗談でしたとか、そういうオチはないよな？」

「ねえ、なのはさん。本当にあなたの隣の席の蒼井颯馬だったの？」

とても信じられません」

とはやてに続き、エレナまでもが言う。

そのエレナの目はどこか怖さを感じる。

それになのは気づくことなく、

「んもぅ、皆揃ってそんなこと言ってる。ほらあそこ……って？あれ？颯馬君どこ行った？」

そこにはすでに颯馬の姿はなかった。

モニターを見つめる2人の影。

「なあ、送り込んだあいつやられちゃったけどいいの？」

「別に構いません。どうせ彼は捨て駒にすぎませんから」

「まあ、別に俺は構わないからな。ってどうする？次は俺が行くのか？」

「あの観察対象はとても興味深いですからね。あなたも私にとっただただの駒にすぎませんからいいでしょう、準備はこちらで手配しときましよう」

「っておい！俺の扱いひどくないか。まあいいか、けど忘れるなよ、俺はおまえの駒じゃない、お前の思い通りに動くと思うな」

と言いつつ、1つの影はドアを開けて部屋から出て行った。

残ったもう1つの影はもう1度モニターを見つめ、

「……クスッ さて、あなたはどう反応してくれます？蒼井颯馬」

ついに踏みだしてしまった。

取り返しのつかない原作^{みち}介入へ。

もがけばもがくほどその泥沼にはまっっていく。

そのときの俺はそれ以外どうすればいいのか知らなかった……

・

・

第12話 転生者と予感（後書き）

さてなんとか12話を書き上げました。このまま作者はどこまで
がんばれるのか!?

オリキャラ募集、秋代様に続き、GIN様、幻想の庭師様ありが
とうございます。

引き続き募集は続けますので皆様のアイデアどんどんお待ちしてお
ります。

颯馬「そういうこと今日書かれても信用されないと思っただよね？」

へ？なんで？

颯馬「だって今日はエイプリルフルだよ？皆作者の言葉なんか信
じないって、現に12話だってこうして予定より遅れたわけだし」

やめてっ！！そういうこと言つと本当に信じられなくなっちゃっ
っっっっっ！！

コラボ企画 転生者と朱き英雄（前書き）

コラボ、行きまーす！

颯馬「君は生き延びることができるか？」

フェルナ《何言ってるんですか、マスター》

コラボ企画 転生者と朱き英雄

出会いは偶然という名の奇跡から。

重なるはずのなかった2つの線が今1つに重なりあった。

それはほんのちよつとかすつた程度のことではしかなかったけれど、俺は出会ったんだ………

颯馬は周囲を見渡す。そこにあるのはいつも通りの風景。いつも通りの鳴海市だ。

けど、どこが違う、どこが違うように感じられた。

あれ？俺なんでここにいるんだっけ？いつも通り授業中寝ようとして、魔王まのほうに百科事典アレで殴られて……あれ、そこから先が思い出せないな……

そこでポケットの中にいる、自分の相棒兼目覚まし時計であるデバイス、フェルナに聞く。

「なあ、俺今何しようとしてた？」

「はあ、私もよくわかりません。っていうかいいかげん目覚まし時計っていう表現やめませんか？」

「……この役立たず」

《ひどっ！》

もう1度周囲を見渡す。とくに変わったところは見られない。

まあ、いつか。とりあえず家に帰って寝るか、と颯馬は考え、家に向かって歩もうとすると、

《マスター、魔力反応です！しかもこの反応は、ジュエルシールド！》

「はあっ！？ジュエルシード！？もうあの事件は解決したはずだろ！？」

《しかし、この反応に間違いはありません。もしかすると……》
「もしかすると……って、嫌だな。その先聞くとめんどくさいことになりそう。」

《もしかするとマスター、ここは平行世界なのかもしれません》
パラレルワールド

「はあああああ！？いやいやいや、そりゃないだろ、タイムスリップ時間跳躍とかじゃないの！？」

《その可能性はないでしょう、だいいちそれなら私がもう1つのマスターの気配に気づいているはずです》

「……マジかよ。」

《それじゃ反応のあったところに向かいますよー！》

「え？やだよ、めんどくさいし、だるいし。」

《何かしらの手がかりがあるかもしれないじゃないですか！》

「……はあ、わかったよ。行けばいいんだろ、つたくめんどくせえなあ。」

と颯馬はジュエルシードの発生源へと足を向けた。

颯馬が発生源に到着するとそこには2人の魔導師がいた。

1人は見間違えるはずもない、高町なのはだ。容姿は自分が見ていたときより幼いが、あの格好、あの悪魔のような砲げ……とにかく見間違えるはずがない。

しかし、もう1人の少年はどこかおかしかった。明らかに纏っている雰囲気アルファ・ステイグマが子供とは思えない。

颯馬は思わず複写眼アルファ・ステイグマでその少年を見る。その少年を構成するものを見る。

なんだ？身体に比べリンカーコアの発達が以上だ、一体何者だ？
やばい、ああいうのとは関わっちゃいけない、よし逃げよう、とす
るが既に遅かった。

あの少年がこちらに気づいた、少年はこちらに向かって左手を掲
げ、

《Electronic Shooter》

雷光の弾を放つ。それを避け反撃をしようか迷うが時既に遅し、
颯馬の首に刀が突きつけられた。

「何者だ。返答次第ではその首が飛ぶぞ」

「い、いや、俺はただの昼寝が好きな一般市民ですよ？」

その答えに、

「それが貴様の答えか？ならその首を・」

「待った待った待った！こつちだつてほら、いきなり首に剣突
きつけられたらどう対応しようか困りますよ、な？」

「・・・ふむ、それもそうだな」

と言い首から刀を離す。

「たくつ、めんど・」

「めんど？」

「いやいや、なんでもないよ！こつちの話だよ！つかお前本当に子
供か？その見のこなし、そのリンカーコアからしてあきらかおかし
いんですけど」

「ふむ、だつたらこつちも聞きたいな。その洞察力はともかく、そ
の目はなんだ？朱の五方星を浮かび上がらせて。おそらくそれで俺
のリンカーコアを見抜いたんだろうが・・・」

お互いに一歩もゆずらず膠着状態が続く。そこで突如、

「きゃああああああああああああああ」

なのはの悲鳴が聞こえた。

「くつ、あの馬鹿！」

と言い少年はなのはのもとへ飛び立つ。

それを見て、

《さあ、マスター！私達も！》

「……え？やっぱ行かないやダメ？あいつ1人に任せてよくない？」

《行くに決まってるでしょうがああああああ》

「つたく、仕方ない、行くぞフェルナ！」

《stand by ready・set up》

颯馬はBJを纏い少年の後を追う。

「貴様、やはり!?」

「いやいや、とりあえずまずはあの化け物を倒そうよ!?たくつ、めんどくさいなあ〜」

「ほう、めんどくさいか、まあいい、そうだな、あの化け物を倒すことが先だ」

《V o l t a i c T h u n d e r B u r s t E d i t i o n》

「バーストファイヤ！」

荒れ狂う雷のような電撃が放たれ化け物に直撃した。

「へえ、いいなその魔法、だったら俺も」

と言い颯馬は左手を掲げ、

《V o l t a i c T h u n d e r B u r s t E d i t i o n》

「バーストファイヤ！」

先ほどと全く同じ攻撃を放った。

「何!?俺と同じ魔法を!?貴様本当に何者だ!?!」

「ああ、そういう突っ込みは後にしない?とりあえずあの化け物にとどめを指すのが先だろう?」

あの化け物は既に弱りきっていた。

「まあいい、終わりにするぞっ!」

「えっと、これっておおっ!とかって言った方が良いの?」

《そこはのりよくいきましようよ、マスター……》

少年は刀を構え、颯馬は宙に手を躍らせ魔方陣を描く、

「烈破緋炎斬!」

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

2つの技が化け物に直撃した。

残ったのはジュエルシードだけだった。

ジュエルシードの封印も完了し、颯馬は少年と対峙していた。

ちなみになのはは気絶しててまだ目を覚ましてません。

「俺の名は高町龍也、貴様の名はなんだ？」

「んゝあまり名乗るのとか好きじゃないんだよなゝ、ってはい嘘です、刀をちらつかせないでください、俺の名前は颯馬、蒼井颯馬です」

「ふっ、面白いやつだな貴様は。どうだ颯馬、俺のもとで修行してみないか？お前ならきつと良い魔導師になれる」

「いやゝ俺そついうの嫌いだし、それに自分より小さいやつに教えられるってのもなゝ」

「ほう、ではまずその考えから改めさせてやろう」

《そつですよ、マスター！この機会に更正しちやいましょうー！》

「っておいお前そつちの味方かよ！？やだよめんどいし、だるいし、もういい逃げるよ！んじやまたな龍也」

と言つと颯馬は走り去っていった。

《更正されれば良かったもの・・・》

「嫌だよ俺、たくっ、面白そうなやつではあるけど修行はごめんだね」

《そつですか、私はとても残念です。ところでマスター》

「ん、何？」

かつたっけ？

そう考え、なのはに向かって、

「なあ、高町さん」

「何、颯馬君」

「高町さんって龍也って名前の兄弟いる？」

「恭也って名前のお兄ちゃんならいるけど、龍也って名前の兄弟は
いないよ？どうして？」

「いや、なんでもない、こっちの話」

あれはやっぱり夢だったのかな、ん〜考えるのがだるくなってき
た……

と颯馬は目を閉じ、

「って、何寝ようとしてるのっ！えいっ！」

「って！ぎゃああああああああ」

颯馬の悲鳴が教室に響く。

1つの出会いはきつと新しい出会いを生む。
人はきつとまたいつか出会うことができる。
願えばきつとかなうはず。

俺が願うかどうかは知らないが。

コラボ企画 転生者と朱き英雄（後書き）

いや、なんかはやくもコラボとかやつっちゃったね。

颯馬「ほんとだよ、まだ12話しか書いてないのに」

まあいいじゃん、楽しいし。

颯馬「でもこうしてみると龍也って伝勇伝の某キャラとかぶってないか？」

う……まあそれは気にしない方針で。

颯馬「まあいつか、あっちの作品見る限り、相当苦労してるみたいだし。うちの作者はハーレムとかそういうの書けないからね」

だってどうやって書けばいいのかわかんないだもん。

颯馬「それにしてもどうして龍也強いのに、高町達に振り回されてんだろ？」

戦闘民族の集まりだからだよきっと。

颯馬「……うちのほうはそんなんじゃないよな？」

……大丈夫だよb

颯馬「いやいやいや、何その間は。やめて？嫌だよ、そういうの？」

GIN様、これからも更新楽しみに待ってます！

颯馬「勝手に終わらすなああああああああ！？」

第13話 転生者は捕まった(前書き)

眠りそうになりながら書いたのでちょっと内容がひどいかもしれません。

第13話 転生者は捕まった

1度回り始めた運命の歯車は終わりが来るまで止まることはない。あらゆるものを巻き込んで回り続けていく。

決して止まることはなく、誰の手もそこに届くことはない。

あのときの俺はそれに抗えると思ってたんだ。

おかしい、明らかにおかしい、だって今までこんなことは1度もなかった。

そうエレナは考え、そして教室の窓側へと目を向ける。

そこには、自分と同じ転生者である蒼井颯馬と高町なのはがいる。

なのはは百科事典で颯馬を叩いているのが見える。

しかし、そんなことは気にならない、どうせいつもの光景だ。

私はその転生者に負けた。

勝てるはずだった。

勝てると思っていた。

いままでだってそうだった。

原作に介入しようとする者を全て叩き伏せてきた。

どんなやつだろうと叩き伏せてきた。

原作を知っているやつ。

原作を知らないやつ。

ただなのは達と仲良くしたいと思ってたやつ。

なのは達と戦いたいと思ってたやつ。

そう、全てを叩き伏せてきた。

自分だけ関わっていればいいと信じて。

それが正しいと信じて。

自分が正義だと信じて。

自分こそが物語の主人公だと信じて。

けど負けた。

あっさりと負けた。

無様だった。

惨めだった。

あいつ、蒼井颯馬は私に向かってこう言った。

<自分の理想論を他人に押し付けてるだけだろ>

あの言葉を認めてはいけないと思った。

認めたら全てが無駄になったことになる。

私はただの最低な人間だってことになる。

だから殺そうとした、そして殺せなかった。

問題はそれだけではなかった。

先日、なのはが戦っているところに蒼井颯馬がいた。そこは別に

どうだっていい、負けた時点でいずれこうなることはわかった。

けど問題なのは、その戦っている相手だった。

相手もまた転生者だった。

こんなことは1度もなかった。

蒼井颯馬以外の転生者は全て叩き伏せた、そう思っていたのに。

あっさりと介入を許してしまった。対策は建てていたはずなのに。

なぜ?どうして?

ええつと蒼井颯馬です。梅雨に入ってもいつも通りにやる気なく人生をのんびり過ごしたいと思ってる次第です。

あの日からなのは定期的に颯馬を管理局に勧誘するようになった。

なのはの勧誘自体は別にどうにでもなることだが、なのはが勧誘してやることから多少なりとも自分のことが管理局に知られてしまっただろう。

今はまだ穏便だが、そのうち管理局は強硬手段にでるかもしれない。

颯馬の能力は管理局がいつまでも目を瞑っていられるようなものではない。

魔力光の変化、自身の魔力量を超えた魔法の使用、そしてなによりその目。

颯馬はそれをめんどくさいなと考えながら、その緩みきつた目を開き隣を見る。

するとなのはがそれに気づき、
「あ、やっと起きる気になったの？」

と、笑いながら言うてくる。

その笑顔を見ると、気持ち少し和らいだような気がした。きつとこれから碌な事が待っていないのだからうなって思う。

原作に少しといえど介入してしまったんだ、もう手遅れだろう。けど、高町を助けたことに後悔はない。

助けなかったら後悔したから。

もしかしたら高町を見殺しにしたかもしれないから。

そう考えると少し心が痛んだ。

もっとはやく行っていればあんな目には合わさずに済んだかもしれないなかったから。

俺が最初からいたからといって結果が必ずしも変わるわけじゃない、そんなことはわかってる。

けど少なくとももう少しましな結果にはなっていたと思う。

だからといって管理局には入ろうとは思わない。あんなめんどく

さいところ入りたくないし、入るやつらの気がしれない。

それと同時に、この寝てばかりの日々からさよならしてはとどうだと考える俺がいる。

しかし、その考えもめんどくさい、だるい、という思考で全てが埋めつくされていく。

まるで拒絶反応を起こすかのように。

まるで今の自分を否定するように。

颯馬はそのことに気がつかない。

どうせいつものことだし、ああ眠いなとそれ以上のことを考えないでその目を閉じようとする。

そして颯馬は気がつかない。

管理局という名の魔の手がすぐ近くまで来ていることに。

放課後の帰り道、そこに1つ奇妙な光景があった。

颯馬が引きずられていた。もちろん引きずっているのは魔王である。

「あの、高町さん？いいかげん放してくれませんか？」

と聞くも、

「嫌だよ、そしたら颯馬君逃げちゃうもん。それにいいよ呼び捨てで、あのときだってそうだったんだし」

と言い、そのまま颯馬を引きずり続ける。

周りに助けを求めようとすることも、金髪フェイトはなんでか知らないけど既に殺気をだしまくりだし、狸はやしは面白がってるし、ありさとすずかは目をそらし、悪魔エレスナは無視してるし、他の生徒はその異様な光景を見て大分距離を取っていた。

「はあ、なんでこんなことに・・・」

颯馬の助けを求める声に彼のデバイス、フェルナが言う。

そしてなのはが、

「逃げ場なんてないよ、颯馬君。管理局が颯馬君のゴールだよ」

「いっやくだ〜!」

颯馬の叫び声が空しく響いた。

どんなに抗っても届かないものがある。

どんなに近づいても届かないものがある。

それはとても大切なことだったのに。

それに俺は気づかないでいた……

第13話 転生者は捕まった(後書き)

春休みが終わったら更新のペースが落ちるんだろぅなとちょっと焦っている

ASTRAYです。

今回はGIN様作【魔法少女リリカルなのは 朱の英雄】から主人公高町龍也殿がゲストとしてきてくれます。

龍也「高町龍也だ。さあ颯馬、貴様を更正させてやるっ」

颯馬「って来てそうそうの一言がそれかよ。ったく、こっちはわざわざ・・・ってやめてください、刀をこっちに向けないでください。今回はゲスト初登場のおめでたいときなんですから、そういうのやめませんか？」

龍也「ふむ、それもそうだな。では次回更正させるとしよう」

颯馬「(次回以降こっという機会があったら絶対に逃げよう・・・)」

とりあえず龍也殿、これをどうぞ。

龍也「ふむ、ウィニットだんご店のだんご詰め合わせか。ありがとうございます
く頂いておこっ」

それでは颯馬、作品介绍を。

颯馬「って俺がやるの？えゝ嫌だよめんどくさいし、フェルナやってよ」

フェルナ《マスター、ここはあなたがやるべきです》

龍也「そうだ、貴様がやれ」

ほらやれ颯馬。

颯馬「まったく仕方ねえなあ。ええつと、高町龍也は改造人間だ・
・はい、冗談だから、その刀いいかげんしまってください。

ウォルロツト・D・ウオーカーは管理局のある実験が原因で子供の姿で長い眠りから目を覚ました。

そして転移して着いた場所は地球だったと。

んでなんやかんやで戦闘民族高町家に捕まり、もとい拉致られ高町龍也という新たな名をもって生活しています。

平穏？な生活も長くは続くことはなく、高町なのはが暴走してそれを止め、今は将来の魔王を育てています。

って感じかな？つまり管理局の『朱き英雄』も戦闘民族高町家にはかなわなかったと。」

龍也「・・・・・・・・」

颯馬「こうしてみるとあれだよ、こっちは大分平和だよな。高町凶暴なところは変わらないけど、そっちほどじゃないし」

フェルナ《マスター！マスター！後ろ後ろ！》

颯馬「フェルナなんだよ、こっちはだるい中ちゃんとやることや・
・ってあの高町さん？なんでここにいるんです？」

なのは「理由なんてどうでもいいよ、颯馬君。ちよっと O H A
N A S H I しようか」

颯馬「ちよっと落ち着こう、な？とりあえず俺は逃げますっ！」

颯馬は逃げ出した！

なのは「逃がさないよ、颯馬君」

ダダダダダッ！！

龍也「ふっ、ならば俺も行こう」

ダダダダダッ！！

颯馬「って何この地獄絵図！？やばい、やばいよ俺！？」

なのは「スターライトブレイカー！！」

龍也「烈破緋炎斬！！」

颯馬「ぎゃああああああああああああああ！！？」

フェルナ《マスタアアアアアア！？》

第14話 逃げた転生者（前書き）

いままでで一番やらかしたような気がする……

第14話 逃げた転生者

人には避けられないときがある。

それはこれからの運命を左右するもの。

それは本当の自分を知るための道しるべ。

俺にはそれがどんなものかわからなかった。

(フェルナ、俺はもう駄目かもしれない)

《いきなり何を言ってるんですか、マスター……》

颯馬は恐怖で手が震えていた。

(思えば長いつきあいだったな……)

《マスター！私達はまだ終わってないでしょう！》

と、フェルナは颯馬に言う。

(いや、もう駄目だ。俺にはこれに耐える術はない)

《しかし！》

颯馬はもう抗うことを止めていた。

(これは日常をだらだらと惰眠を貪っていた俺への裁きなんだよ、

フェルナ)

《まだやりなおせます！まだ間に合いますよ！》

颯馬は覚悟を決めた。

(じゃあなフェルナ。いままでなんだかんだで楽しかったよ。それじゃ逝ってくる)

《マスターアアアアアアアアアア！》

そう颯馬は覚悟を決めた。

きつとこれは転生した俺に最初から定められていた運命だったの

かもしれない。

しかしそれに気づくのが少し遅かった。

もはやこれは避けようのない1つの結果。

だから颯馬は抗うことを止めた。

だから颯馬は諦めた。

だから颯馬は覚悟を決めることができた。

そして颯馬は動いた。

その結果を受け入れ、

リンディ茶
運命を口にした……

時刻は少し遡り、俺はハラウン家まで連行されました。

大体管理局にまで連れて行かれることはないのは目に見えていたから、大方検討はついていた。

いざ入りそこに居たのは犬と糖尿病だった。

このときまで、俺はめんどくさい話を聞かされるんだろうな」という考えしかなくて、あるものの存在を忘れていた。

適当に挨拶を済まして（とりあえず犬のことを「ポチ」って呼んだら噛まれた）、すぐにリンディ茶は現れた。

そのままだったら、まだ耐えられた。まだ耐えられた。まだ耐えられた。問題はその後フェイトの言葉だった。

「蒼井は砂糖多めがいいって」

「あーそうなの、ごめんなさい」

いやいやいやいやいや、何言ってるの、やめて、やめて、やめろおおおお。

遠まわしに死ねって言うてるよね！？俺何か恨まれるようなことした！？そして高町！それをなぜ止めようとしないういいういいうい！！？

狸は必死はやしてに笑うの堪えてるし、エレナは若干顔が青ざめてるし、

なのはにいたっては信じられないという目でこっちを見ている。それりゃ俺だつて信じたくはないよ。

「はい、どうぞ」

と言つてリンディ茶それが俺の手に渡された……………

そして俺は飲み干した……………

うん、あれだね。俺もう甘党とかそういう人達とかと仲良くできそうにないよ……………

あれは甘つたるいとかいうレベルを超えていた、あまりの威力に意識が飛びかけた。

なのははこちらの方に目を向けて、

(えつと…………大丈夫?)

と気の毒そうに言つてきた。

(だったらあのとき止めてくれよ……………)

(にははははは、フェイトちゃんが言つたから本当なのかな?つて思つて)

(いや、無理だから。あれは人が飲むものじゃねえ…………)

(でも颯馬君飲んだよね?)

(あれを飲まなかつたら飲まなかつたでなんかめんどくさいことになると思つたからさ…………)

(えつと…………本当に大丈夫?)

(うん、大丈夫だよ…………ちよつと川が見えるだけだから……………)

(颯馬君?!?)

その後、リンディ・ハラオウン糖尿病から時空管理局についての詳しい話がされた(内容はご想像におまかせします)。

全く聞く気はなかったのだが、リンディ茶のダメージが予想以上

に大きく、吐き気がしばらく続いたため、寝ることもできず、全て聞いてしまった。俺としたことが……

内容は原作で得ていた知識ととくに変わりはない（内容はご想像におまかせします）。

話も一通り終わり、リンディが、

「それでできればあなたに管理局に入局していただけませんか？あなたの能力ならそれなりの身分と将来を保障することができます」

との言葉に颯馬は嫌そうな顔をして、

「えっと、そんなこと言われてもそんなところに俺は入る気なんて全くないし、めんどくさいし」

「え、颯馬君入ろうよ、めんどくさいとか言わないで、ね？それに、ほら、管理局に入っちゃえば、就職とかそういうこと心配せずに済むし」

と、なのはが言ってきた、

「……いやいやいや、そんな生々しい話はやめようよ、まだ14歳なんだしさ」

「ん、確かにそうなのかもしれないけど、年は関係ないと思うよ。大切なのはその道に向かって進むうと思うんだと思う。だから今はめんどくさいかもしれないけどいつかきつと颯馬君の考え方も変わるよ！」

と、言うも颯馬はめんどくさそうに、

「けどな、俺そついうめんどくさそうな組織入る気ないし、だいいち俺この能力で食ちからつていこうって思っちからてないんだよな」

なのはは驚いて、

「ふえっ！なんで！？それだけの能力もちからってるのに！？」

「ん、なんかめんどくさそうじゃん色々」

「そんな曖昧に答えられてもよくわかんないよ！なんで……」

「わかりました。颯馬さん、管理局の入る気はないんですね」

と、なのはの言葉を遮りリンディは言った。

颯馬は緩みきつた目をリンディの方へ向け、

「うん、ないね」

「……まあいいです、あなたの話を聞くかぎりこうなるのは検討がついてました」

「んじゃ、もう話すことなさそうだし、俺は帰ります」

と言い颯馬は立ち上がる。

なのはは納得がいけないようだが颯馬はそれを気にせず帰ろうとする。

「まだ帰らないでください。これで話が終わったわけではありませんせん」

と帰ろうとする颯馬をリンディは呼び止める。

「え？これで終わりじゃないの？」

「いえ、まだあなたに聞きたいことがあります」

颯馬はまた嫌そうな顔をし、

「えゝそれってなんかめんどくさそうな気がするから嫌なんですけど……」

「そうかもしれませんがこちらにとって重要なことなんです」

なのは達はこのことを知らなかったのだろうか、なんだろうという顔をしている。

颯馬はめんどくさそうにしながら、

「んで聞きたいことって何？さっさと帰って寝たいんだけど」

「あなたの能力、その目についてです」

「……」

その言葉に周りの空気が一変する。

「颯馬さん、あなたの能力は管理局にとって大変興味深いものであると同時にとっても危険な能力である可能性があります。魔法のコピー、魔力光の変化、これはあなたの能力の一部じゃありませんか？正しくは魔法の解析、及びその再現なのではありませんか？」

「んゝ違っただけだなゝ、俺魔法のコピーしかできないんだけどな」

「それだけでも十分危険です。だいいちそれだけでは納得がいきま

せん。レイジングハートの記録を見る限り、あなたは先日の戦闘中に『鉄の魔神』がを砲撃魔法を撃とうとした際、無理矢理その攻撃の軌道を変えました。つまり、あなたはどのような攻撃が来るのかわかっていた、違いますか？」

「いや、あれはなんかやばくねって思ったからそうしたわけで・・・」

「本当にそれだけですか？だいいちあなたはなのはさんと同じ魔法だけではなく、エレナさんと同じ魔法も使っています。それに見る限りミッド式の魔法とそれとは違う術式の魔法を使い分けてました、それは一体何なのですか？」

その言葉に颯馬は、

（あれ？けっこうやばくない？なんか色々とちゃんと見られてるっばいし、どうすればいいかなあ〜フェルナ）

と彼のデバイス、フェルナに聞くも、

《いいじゃないですか、洗いざらい喋って管理局に入ってしまったえば》
（・・・はあ、なんでそこでそういう意見にいつちゃうかな〜、俺はそういうの嫌なの）

《マスター、だって管理局に入ればもう就職のこととか考えずに済むんですよ？》

（なのはと同じことを言うんじゃないやねえ。人材不足でしかもあの仕事量、めんどくさ過ぎてやってられません）

フェルナからは助言がもらえず、颯馬はどうすればいいかな〜って考えているところに、今まで黙っていたはやてが、

「リンディさん、なんでそんなこと聞く必要があるん？確かに蒼井君の能力は気になることがけっこうある。せやけど本人は管理局には入る意思はないし、下手に言及するのは失礼とちゃうん？なんか都合の悪いことあるんか？」

その言葉にフェイトも頷き、

「確かにはやての言うとおりでと思うよ、母さん。確かに記録を見る限りすごい能力を持つてるとはわかるし、だからなのはが入局

させようとするのもわかるけど、それでも彼は一応民間人なんだし、本人の意思を尊重させるべきだと思う」

と言う。それにリンディは口を開き、

「本当はこのことは言いたくなかったのだけれど、仕方ありませんね。昨日、本局から蒼井颯馬の能力について調べるようにという連絡があったの。だからこうしてここに来るようにあなた達に頼んだの」

その言葉になのはは驚きを隠せず、

「リンディさん！？ここに颯馬君を呼んだのは管理局に勧誘するためだけじゃなかったんですか！？」

「ごめんなさい、なのはさん。でも管理局はこのような存在を放っておくわけにはいかないという決定をしたの」

そして颯馬は頭を掻きながらめんどくさそうに、

「んじゃ、俺帰ります」

「「颯馬君（さん）！？」「」

「いやだつてめんどくさそうじゃん？それにそんなこと言われちゃなおさら喋るわけにはいかないでしょ。管理局の事情なんか俺には関係ないしさ、それじゃっ」

と颯馬は言つて速やかに出て行った。

「本当に帰っちゃった……」

となのはが言い、

「追わなくていいの、母さん？」

とフェイトはリンディに聞くが、

「いえ、いいです。今聞いても結果は変わらないでしょう。後日改めて聞くことにします」

と言い諦めた。

第14話 逃げた転生者（後書き）

すいません、どう繋げていけばいいのかわからず、更新が遅れたにもかかわらず、大分適当にして、中途半端な部分で終わらせてしまいました。

それと、学校が始まったので更新のペースが遅れてしまおうと思います。真に申し訳ありません。

更新停止のお知らせ

すみません、「やる気の欠けた転生者」の更新を停止します。

理由は、はい、すみません、作者の技量不足です。

色々支離滅裂なところがあつたり、設定がちゃんとしていないとかで大分ぐだぐだになってしまいました。感想にも書かれていますとおり原作キャラの扱いに問題があつたり、とにかく問題だらけだったと思います。

一応ある程度小説について勉強してから、この作品を一から作り直していこうと思つてます。「やる気の欠けた転生者」で募集した才子キャラもそちらで登場させる予定です。

今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4834k/>

やる気の欠けた転生者

2010年10月8日10時19分発行